

## 清流に棲むブユの駆除活動

里草会顧問 福井正樹

朝食の時、叔父が祖母の首の周りを見ながら「もう刺す所がないほど刺されている」と言った。私が中学生になって、ブユの研究をすることになったと話した時のことである。ブユはやっと明るくなったばかりの頃やたそがれ時に、山田など谷の最奥部で作業していると、顔の回りにまとわりつくように群がり、素早く刺して逃げる。

蚊のように皮膚に止まってから、やおら刺す場所を探すというようなのんびりした刺し方ではない。痛いと思って叩こうとするときには飛び去ってしまう。祖母は朝食の前のうす暗がりに、蚕の桑を摘んだり、ちょっとした畑仕事や草刈りをしてきた。いわゆる朝飯前の作業だ。ブユの活動時間帯なので、露出している皮膚のいたるところを刺される。古い刺し跡は2ミリくらいの黒丸で、新しいのは赤い。それが首周りから胸にかけてびっしりついていて、まさに刺すところがないほどなのだ。

校長先生から私達に、このブユの研究と駆除する活動をやるように言い渡された。校長は郡の理科教育の指導者で、衛生害虫の駆除活動の依頼を引き受けたらしい。京都から大学の先生が指導に来てくれて、進駐軍からも費用や資材が出されているということだった。当時の大学の先生は、山奥の中学生には想像ができないほど偉い人だった。

私は小学校のころから虫博士と言われるくらい昆虫に取り組んでいた。何しろ日常生活は虫だらけで、母に買ってもらった小さな昆虫図鑑でたいがいの虫を調べることができると。案外大人になっても子供のころからの虫好きが続いている人がいるものだ。夏休みの頃にセミなどを取る体験をした人は多い。私は蝶や甲虫から始めて、身の回りの様々な虫に興味を持った。

しかしブユはこの時初めて関心を持って取り組み、ある程度の成果を上げ、相当認められていたらしい。私は資料づくりをした記憶しかないが、高校生になって他校から来た同級生が、私がすごい研究発表をしたので、偉いやつがいると思ったそうだ。ただブユの取り組みは中学校の頃のみで終わってしまった。

生物はすみわけをすることが知られているが、水生昆虫も水の状況に応じてすみ分けている。運河のように淀んだヘドロにはユスリカなどが住み、静止している水には蚊が発生し、少し流れがあるところにヤゴやホタルなど、更にきれいな上流にはトビケラやカワゲラなどが石の下などで生息している。「あしたに生まれ夕べに死す」と言われるカゲロウは、羽化して交尾をし、ただ自分が生まれてから流されてきた川をさかのぼって、生まれた場所に卵を産み付けると死んでしまう。口も消化器もない。一生の川の中の生活を、羽化した1日で終わっても、次の世代を自分が孵化した場所から始めさせるのだ。

ブユはさらに最上流、川になる前の岩などからしみだしてくる水の滴る源流に生活している。水田の排水や人家の雑排水が流れ込むような川にはいない。私たちのフィールドである桜井市三谷の川もずっと観察しているが、ブユの幼虫は見かけない。ブユは時々眼の

回りなどを飛び回ることがあるので、場所や時間によると出現しているのであろう。

ブユの幼虫は、水源の清冽な水にぬれている草の葉の裏などに、スリッパのような網のポケットを作り、この中で生活している。尻に吸盤があり、それでスゲなど水草の葉に吸い付いて体を支え、口から糸を出して体を納める袋を作る。袋の形や大きさでいろいろな種類を見分ける。水源に近いものは小さく、下流には大きめの種類がいる。幼虫だけがいるのは真冬の川で、春暖かくなってくると次々に羽化と産卵を繰り返す。

だから駆除するには成虫が全くいない真冬に、川の源流から薬剤を流してこの幼虫を殺すのである。まず村中の川の源流を図に書き、どのようなブユの種類が生息しているかを調べた。そして2月の極寒の頃、雪の中をたどれるだけ上流に上り、小さな流れに薬剤を流した。当時は十分な防寒具もなく、靴も貧弱で、この作業はつらかった。この乳剤はDDTだと聞いたが、量はすべてに行き渡らず、校長先生の村などで試してみた。

今思い出してみると、相当大変な作業をしたわけだが、この当時はまだ人のために役立つ、人を助けようという倫理感がすべての人の心底にあった。「滅私奉公」の戦中の意識はなくなっていたが、その時代の自己犠牲や奉仕の精神はまだ残っていた。人のためになることをする、自分のことより家族や他人のことを考える、というような行動規範があった。当時の日本人の心の基底にあったこの意識が、やがて高度経済成長をもたらし、企業や日本経済の発展につながったのかもしれない。

とにかく山奥の作業する人に、ブユは苦痛をもたらしていた。中学生の単純な気負いから、村の人達のつらさが少しでも軽くなるよう貢献をするのだと真剣に考え意識して取り組んだ。祖母などはいっぱい刺されても、気にせずに働いていたが、さされたところはかゆいし腫れあがる。当時はブユに刺されながらも農作業はしていたから、ある程度の免疫や耐性を持っていたのだろう。1960年代末に筑波山の麓でキャンプをしたとき、女性二人が2、3か所ブユに刺されて腫れ上がり、医者に行って治療してそのまま帰宅してしまった。有機栽培を目指す主婦たちが、山田を借りて泊り込みで草取りをして、朝早くと夕暮れ時に顔中刺されて腫れ上がり、そのひどい苦痛を報告していた。明るい陽射しの中ではまず刺されない。

今のように虫を防ぐ薬剤や装備もなかった。この時間帯に仕事をする時は、ぼろ布を<sup>な</sup>縋い合わせたためのひもを作り、それに火をつけて燻らせた。これを「ひづと」と呼んでいた。なにしろ自給の農山村はすべてのものを利用し尽くすようにできている。浴衣がもう着られないほどくたびれてくると赤ちゃんの襁褓になり、更に古くなると雑巾に使い、雑巾にも耐えないほどぼろになるとひづとにしてぶゆの忌避に煙を出させた。

効果は蚊取り線香には及ばないが、それでもないよりはましだった。ブユも蚊などと同じように、人の吐く炭酸ガスと体温を感じて寄ってくる。ひづとはくすぶる熱と発生する炭酸ガスでブユを感<sup>な</sup>わしていたのだろう。いまなら祖母のように刺すところがないほど刺されることはないだろうが、抵抗力がないので腫れ上がる苦痛はよりひどい。中学の卒業式に、校長は特別賞を設け私の研究成果と努力を表彰し副賞に硯箱セットをくれた。